

山上憶良論

林 田 正 男

(一九九六年五月一三日受理)

はじめに

『万葉集』巻五には嘉摩三部作(『山上憶良』中西進)と呼ばれる筑前国守山上憶良の三部の大作を載せる。「惑へる情を反さしむる歌」(八〇〇～八〇一)、「子等を思ふ歌」(八〇二～八〇三)、「世間の住み難きことを哀しぶる歌」(八〇四～八〇五)よりなる。いずれも漢文の序プラス長歌プラス反歌の形式をもつ。

前稿ではこの漢倭混淆の文学の生成について論述した。^{注1}

次に論の進行上、その概要を記す。

憶良は巻五冒頭にある大伴旅人の「凶問に報ふる歌」(七九三)の漢倭混淆の作に示唆をうけ、それを進展させた漢倭混淆の独自の作をものした。その様式は中国文学の『文選』な

どの「賦」の形式より学んだものと思われる。「賦」には「序」があり、次に「本文」、最後に「乱(または反辞とも)」という順序をとる。三部作の「序・長歌・反歌」という順序は「賦」の様式どおりである。

「惑える情を反さしむる歌」では、農耕にいそしめ一部の異端者に対して呼びかける様式をとる。その対象としたのは道教的異端の修業者も含まれていた。それは、「天へ行かば汝がまにまに」「ひさかたの天道は遠し」の表現の解釈や史書に記す「亡命山沢」の禁勅の趣、および嘉摩郡という渡来系の集団居住者の地域が近いという面からもそれがいえる。「遺るに歌を以てし、その惑ひを反さしむ」は『詩経』の大序や魏分帝の「文章は経国の大業」などの中国古代詩の思想や精神を主体的に取り込んだ憶良独自の作品である。そして、叙事と抒情が一体化した漢倭混淆の「述志の文学」を生成した

と論じた。

(一)

嘉摩三部作の第二作も前述したように漢倭混淆の形式をとる。「和歌の分野において、『序十和歌』の表現形式は、いわゆる万葉第三期に入って初めて認められるもので、特に筑紫における旅人と憶良によって創始された文学形式であることは強調されてよい。」(別冊国文学『万葉集必携Ⅱ』)「山上憶良事典」(村山出)との指摘がある。従うべき指摘である。ただし厳密には、旅人の場合は序文プラス短歌群であり、一方、憶良は序文プラス長歌プラス短歌の形式をとる。また両者の志向する歌の世界も異なる。

しかし、村山氏の指摘されるように旅人・憶良によって創始された新しい漢倭混淆の文学であることに相違ない。次にその第二作を挙げる。

子等を思ふ歌一首 并せて序

釈迦如来、金口に正しく説きたまはく、「衆生を等しく思ふこと、羅睺羅のごとし」と。また説きたまはく、「愛するは子に過ぎたりといふこと無し」と。至極の大

聖すらに、なほし子を愛したまふ心あり。況や、世間の蒼生、誰か子を愛せざらめや。

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ
いづくより 来たりしものそ まなかひに もとなかかり
て 安眠しなさぬ (巻五・八〇二)

反歌

銀も 金も玉も なにせむに 優れる宝 子に及かめや
も (八〇三)

著名な憶良の子等を思う歌である。万葉歌人の中でも憶良は独創的な特異な歌人である。例えば右に挙げた「子等を思う歌」などがそれである。「憶良ほど、父母・妻子を多く歌に詠みこんだ作者は他に居ない」(『万葉集全注』巻第五、井村哲夫)と指摘があるように、その歌数も多い。

父・母 巻五 800 同序 886 887 891 892
子 巻五 802 803 897 899 900 904

妻子の用例も(巻五・八〇〇、八九二、巻二六・三八六五、三八六九左注)と四例ある。このように憶良には他の万葉歌人にくらべて代作を含めて肉親を詠んだ歌が多い。

山上憶良臣の宴を罷る歌一首

憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ それその母も 我
を待つらむそ(卷三・三三七)

右も著名な憶良の歌であるが、ここでは子と母が同時に詠み込まれている。右に挙げたように憶良には子を詠んだ歌が多数ある。前に憶良は特異な歌人といったが、歌材の点からそれがいえる。ちなみに憶良以外に父親が子を詠んだ歌は、卷二十の防人歌(四三四七、四四〇一)に二首あるのみである。

「子等を思う歌」の序文は、「釈迦如来が正に金口きんこうでお説きになったことには、」と説き起す。そして釈迦如来は「衆生を等しく思うことは、我が子羅睺羅を思うのと同じだ」と述べる。羅睺羅は在俗の時に儲けられた一子の名。また説かれるには、「愛執の迷いは子に勝るものはない」と述べ、以下の論理の叙述の前提として設定している。そして、「釈迦のような無上の大聖人でさえ、やはり子に愛着する心をお持である。」ましてや、「世間一般の人々で、誰が子に愛執しないでいられようか」と述べる。この最後の部分が憶良は言いたかったのである。

右の序文にある「愛無_レ過_レ子」「誰不_レ愛_レ子乎」にでる「愛」

について、『新編日本古典文学全集』(巻第五解説)は、

もし今風の自己犠牲・献身の意に解したら誤りである。なんとなれば、万葉当時はもちろん、近世以前の用法では、愛はそのような無私の情から発した美談的行為ではなく、貪欲・執着どんよくであり、煩惱そのものを意味する語であったからである。

憶良の言う「愛子」とは、彼の口癖で言うところの「すべなきもの」の一つで、まつわり付く子等を煩わしく思いながら、さりとて捨て去ることもならぬ情けなさの告白であった。憶良はこのどうにもならぬもの、仏語でいう「八大辛苦」……の諸相をめぐり出して見せ、また別格の苦としての貧の実態について、国守として直目ただめに見た庶民の悲惨な生活を「風交かぜまじり雨降る夜の雨交たまじり雪降る夜は……」(八九二)と描写して、要人に示した。

と説くように、仏教の思想では「愛」は、煩惱の一つと考えられていた。

「等_二思衆生_一、如_二羅睺羅_一。」は、大般涅槃経(壽命品)に「等視_二衆生_一、如_二羅睺羅_一。」によるという。これは衆生への法愛の極みを表明したものであって、一子羅睺羅への断ちがたい愛

欲を強調したのではない。^{注2}

釈迦は、「子がある、財物がある、と言って、愚かな世間は汲々としている。人間は仮の存在なのだから、どうして子や財物を憂えることがあるのか」『法句経愚問品』と教えている。

釈迦の生存年代については異説が少くないが、一説によると前五六年〜前四八六年という。北インドのカピラ王国の王子として生まれた。成長後、コーリー王国王女と結婚し、一子ラーフラ (Rahula) をもうけた。二九歳のとき王宮を出て沙門となった。ブタガヤの菩提樹のもとで沈思冥想し、三五歳で大悟成道して、覚者となった。その後、北インドの諸地方を遊歴して教化を行ない。クシナラで八〇歳で入滅したという(『東洋史辞典』創元社)。

在俗当時に一子をもうけられ、その一子を慈しまれたことは事実であろう。しかし、序文に説く文言は悟りを開かれた後の釈迦の金口直説のように述べている。同じことは「愛は子に過ぎたるはなし」にもいえる。これは『雑阿含経』巻第三十六に見える某王の言『愛スル所子ニ過ギタリトイフコト無シ』による。憶良はそれを釈迦の言と曲解している(『新編全集本』とあるように釈迦の言ではない。これについて大久保廣行氏は、^{注3}

羅睺羅への愛念を引合いに出したのは、じつは衆生への愛の深甚無限なることの単なる比喩的レトリックに過ぎない。その比喩部分を憶良は真実であるかのように強調しようとした。宗教的法愛を切り捨ててまで、俗世間的な欲愛に光を照射しようとしたのである。それは一種の詭弁ともいふべき論理のすりかえであって、仏教に詳しい憶良がそれを意識しないはずはあるまい。彼は後続の自己の主張をゆるぎないものとするために、この原理的前提において意図的な論理のすりかえを行なったのである。

と説く。憶良の意図的な論理のすりかえとみるか、問題もある。井村哲夫氏(注2)が説いているように「憶良の意識的操作でなく、彼独自の『強調的詠嘆的気分に影響された一種の感情論理』に導かれた子への愛の強調であった」とみることもできよう。いずれにしる序文の叙述は「愛子」という煩悩愛を肯定するため釈迦の権威を背景においた強調表現といえる。

「世間の蒼生、誰か子を愛せざらめや」と、衆生の凡愚の我々が子をひたすら慈しむことの道理を強調して序文を閉じる。

長歌は子供の好物である瓜・栗を食べると、その時はいつも子のことが思われる。と解するのが一般的であるが、東茂美氏は、^{注4}「この瓜や栗がこどもが嗜好するものであるという従来の解釈は、じゅうぶんではない。瓜と栗は宜子祥の習俗から歌に取り込まれたものだったようで、親と子との重なる輪廻の始発、つまり受胎と誕生の風景をありありと呼び起こすものであった。」と説く。

「いづくより来たりしものそ」については、契沖の『代匠記』に「いかなる過去の宿縁にて、わが子と生まれこしものぞという心なり。」と説くように、仏典による表現を踏え（涅槃經高貴徳王菩薩品・十住毘婆沙論知家過患品）、いったいどういう宿縁でどこから我が子として生まれて来たのかと問う。子に執することは煩惱であることを充分知りながらも、「眼前にむやみにちらついて、安眠をさせてくれない」と子への愛執を訴える。

長歌は九句よりなり、世間の蒼^{あそひとくさ}生の側からの詠である。窪田空穂（金集第十五）は、「この歌のように短い独立文を用いて引締まった言い方をし、立体感を盛り上らせているものは、他にはない。これは憶良の強い総合力が、感性によって生かされ、この定型と微妙に調和しているからである。完璧と称しうる作である。」と高く評価している。

長歌は全体九句と短いが、子どもを主として、瓜・栗という現実の俗なものを素材としている。一方、反歌は観念的な自身の心情を主として、金・銀・玉などの雅なるものを対象とし、俗と雅、現実と観念を対照させた趣をもつ。ちなみに憶良には、「世の人の 尊び願ふ 七種の 宝も我は なにせむに」（巻五・九〇四）と七種の宝より子供という宝の方が大切であることを強調している。

反歌の語法について『新編全集本』に「銀・金・玉の三つを並置して主語とし、それに対する述語が第三・四句と第五句というふうに分れている。」と説明する。ナニセムニは反語と呼応する疑問の副詞。

長歌は子を思う親の愛、俗人の我執の愛ゆえの苦悩であり、反歌の子の価値の賛美も苦悩の尽きない世の中を生きる支えとしたものである。そしてそれは、愛の束縛という逃れ難い苦しみの中から選り取った結論である。

ちなみに、この歌を製作した神龜五年（七二八）、憶良はそのとき六九歳であった。かなりの高齢であり、歌に詠まれた瓜や栗を食べると思ひ出すような幼児がいたかは疑問である。しかし、川口常孝氏が説くように憶良の子を詠んだ歌には「憶良自身の子供が体感として息づいている」と述べるように、憶良の作品には彼の個性の心情が濃厚であり現実的存在

在として認められる。だから彼の体験が右の作品群にも作用しているともみるべきである。

(一)

巻五には同じ憶良作の「児等を思ふ歌」と「男子名を古日に恋ふる歌」を載せる。

老いたる身に病を重ね、年を経て辛苦み、また児等を思ふ歌七首 長一首 短六首

たまきはる うちの限りは(瞻浮州の人の寿) 一百二十年
なることを謂ふ) 平らけく 安くもあらむを 事もなく
喪なくもあらむを 世の中の 憂けく辛けく いとなき
て 痛き傷には 辛塩を 注ぐちふがごとく ますます
も 重き馬荷に 表荷打つと いふことのごと 老いに
てある 我が身の上に 病をと 加へてあれば 昼はも
嘆かひ暮らし 夜はも 息づき明かし 年長く 病みし
渡れば 月累ね 憂へ吟ひ ことことは 死ななと思へ
ど 五月蠅なす 騒く子どもを 打棄てては 死には知
らず 見つつあれば 心は燃えぬ かにかくに 思ひ
煩ひ 音のみし泣かゆ(巻五・八九七)

反歌

慰むる 心はなしに 雲隠り 鳴き行く鳥の 音のみし
泣かゆ(八九八)

すべもなく 苦しくあれば 出で走り 去ななと思へど
此らに障りぬ(八九九)

富人の 家の子どもの 着る身なみ 腐し拾つらむ 絶
綿らはも(九〇〇)

荒袴の 布衣をだに 着せかてに かくや嘆かむ せむ
すべをなみ(九〇一)

水沫なす もろき命も 栲繩の 千尋にもがと 願ひ暮
らしつ(九〇二)

倭文たまき 数にもあらぬ 身にはあれど 千年にもが
と 思ほゆるかも(九〇三)

〈去にし神亀二年に作る。ただし類を以ての故に、更に茲に載す。〉

天平五年六月丙申朔の三日戊戌に作る。

右の歌の前には長文の「沈痾自哀文」(重い病いに沈み自ら悲しむ文)と「悲歎俗道仮即離、易去難留詩」の序と詩を載せる。この倭歌と合わせて三部作をなす。重病を始めとする感乱と苦悩を受けて、右の倭歌に新たに子を登場させる。

子供は、憶良の生きるための絆きずなとなっている。

右の長歌は、「この世に生きる限りは無事平穩で安樂にありたい」と、歌い起す(六句)。ところがその願に反して、病苦・老苦に呻吟する様を「痛い傷口に辛塩を振りかける」「重い馬荷に荷物を重ね載せる」という諺を引用してその辛苦を述べる。「瞻浮州の：」「いとのかきて痛み傷：」は先の「沈痾自哀文」にも見えた。そして長歌は、いつそのこと死んでしまいたいと思う、「世間の厭うらげく辛つらけく……死ななと思へど」まで第二段。第三段は「五月蠅ばへなす」から「音のみし泣かゆ」の終まで。真夏の蠅ばへのようにうるさく騒ぎ廻る子供らを打ち捨てて死ぬことはとてもできず、じっと子供を見ていると心はいらだち燃え立ってくる。あれやこれやと思ひ悩んで、泣けて泣けて仕方がないと詠じる。

この作品は題詞にあるごとく老・病の「経年辛苦」と子等を思う(見つつあれば 心は燃えぬ)歌である。憶良は「沈痾自哀文」によれば、初めて痾かに沈みしより「十余年を経た」とある。また「いま七十四歳鬢も髪も白髪交じりで、体力も弱った。単に年老いたばかりでなく、さらにこんな病気を加える身となった」と述べる。そしてその病状について、「手足は動かず、関節という関節はうずき、体はひどく重くて、まるで鈞おもり石を背負っているようである。天井からたらしした布に

すがって立とうとすると、翼の折れた鳥のようだし、杖を頼りに歩こうとすると、足をひきまざる驢馬ろばのようである。」と述べる。

右の歌の反歌九〇三番歌の左注に天平五年六月三日とあり、憶良が筑前国守を致仕ちしし都に帰京してからの作である。ここでは新たに子を登場させ倭歌の長歌と反歌をもって三部作の全体を閉じている。

次に長歌の主な語句を簡潔に注しておく。

「たまきはる」ここはウチにかかる枕詞。「うちの限り」ウチは末詳。現とも内の意かともいう。「瞻浮州せんぶしゅう」仏教の宇宙観では世界の中心とされる須弥山しゆみせんの南にある国。ここは人間世界をいう。「喪」不幸、災害。「ことごと」いろんな解釈があり難解であるが、橋本進吉『上代語の研究』「ことさけば」の『こと』と如の『ごと』に従って、同じことなら死のうと思うが、「」の意とみる。「五月蠅ばへなす」五月のさわがしい蠅ばへのうに。さわがしくまつわりつき、うとましいものたたとえ。サは接頭語。「打棄うつてては」ウツツは、打チ棄うツの約。

長歌は老疾の経年辛苦を常凡な庶民的な心情として述べる。また子供をじっと見つめていると「心は燃えぬ」と生きることへの熱い思いが燃え立つと詠じる。まさに「まされる宝 子にしかめやも」(巻五・八〇三)であり、憶良の生きる

ことへの絆きずなとなっている。

反歌八九八「雲隠り 鳴き行く鳥」は「音のみし泣かゆ」を起す序。長歌の末尾を受けて、やや細かく語句をかえて、くりかえしている。

二首目の八九九の歌も長歌後半部の「月累かさね……死ななと思へど」を受けて、ここもくりかえしている。「すべもなく」は、何ともする方法がない。どうしようもなくせつない意。憶良にはこの「術すべなし」の用例が十一例ある。

愛はしきよし かくのみからに 慕ひ来し妹の心の 術も
術なさ(巻五・七九六)

もその一例。私はかつてこの憶良の「術なし」について、次のように論じた。注6「情」は常住不変、不老不死を願っても、現実に人は老いやがて死ぬ。これはこの世の当然の「理」である。死を理であると知りつつ、なおもそれに抗する苦悩、その結果が「術なし」という辞句を多用させるのである、と。「此らに障りぬ」コラのコの原文「許」は乙類のコに当る。「子等」と解するには、「子」のコが甲類であるべき点に疑問があり、コの甲乙の発音の別は平安初期まで守られていた。コレ・ココ・コノなどの「此」は乙類で作者は傍らの子等を

さして、こいつら、と言ったとする説による(新編全集本)。

三首目の九〇〇「着る身なみ」ナミは形容詞ナシのミ語法。「絶綿たつとらはも」「絶」は絹布。「綿」は真綿。木綿の伝来は、延暦十八年、三河国に崑崙人が渡来持参したという『日本後紀』。「はも」は文末の体言について、強い愛惜や執心などをこめた詠嘆をあらわす(係助詞ハともの復合)。歌は、富人に対する一種の憤りともとれる一面がある。以下四首は長歌の内容を深め具体化した趣をもつ。

四首目九〇一「荒栲」は、楮こうそや麻・藤などで作った織り目のあらい布。「布衣」は粗末な衣服。「着せかてに」カテニは可能を表す下二段の補助動詞。ニは打消の助動詞ズズの連用形。前歌の「絹綿」と「荒栲」、「富人」と「自分の子」(我が子と見立てたものか)とを対比させ貧乏な生活状態を示す。五首目九〇二「水沫たくなわなす」は、水の泡のように。「栲繩たくなわの」長シなどにかかる枕詞。ここは千尋ちんじんにかけた。タクナハは楮こうその繊維でよった繩。「千尋ちんじんにもが」ヒロは両手を広げた長さ。モガは、願望。くでありたいの意。

六首目の九〇三「倭文したまき」は「数にもあらぬ」の枕詞。シツタマキは外来の綾や錦に対して、日本古来の文様のある布で作った腕飾り。上等なものは玉石や貴金属で作る。

前歌とともに「情」と「理」の相剋を経て、子ゆえに「情」

の「千尋」「千年」を願って歌群の結びとしている。九〇三の歌には「去にし神龜二年に作る。ただし類をもちての故に、さらにここ載す」と注している。神龜二年（七二五）は、この前後の歌が作られた天平五年（七三三）より八年前の作。当時、憶良は六十六歳。その翌年の神龜三年ごろ筑前国守となった。

憶良の詠んだ「子等」がはたして憶良自身の子であるか否かということについては、論も分かれる（実子・孫・知人の子・虚構の子^{注7}）。前にも触れて、彼の体験が作用していると述べたように、子等は憶良にとっては、「かからはしき」現実的存在として詠じている。

(三)

男子名を古日といふに恋ふる歌三首 長一首 短二首

世の人の 尊び願ふ 七種の 宝も我は 何せむに 我
が中の 生まれ出でたる 白玉の 我が子古日は 明星
の 明くる朝は してきたへの 床の辺去らず 立てれど
も 居れども 共に戯れ 夕星の 夕になれば いざ寝
よと 手携はり 父母も うへはなさがり さきくさ
の 中をを寝むと 愛しく しが語らへば いっしかも

人となり出でて 悪しけくも 良けくも見むと 大船の
思ひ頼むに 思はぬに 横しま風の にふふかに 覆ひ
来ぬれば せむすべの たどきを知らに 白たへの た
すきを掛け まそ鏡 手に取り持ちて 天つ神 仰ぎ乞
ひ禱み 国つ神 伏して額つき かからずも かかりも
神のまにまにと 立ちあざり 我乞ひ禱めど しましく
も 良けくはなしに やくやくに かたちつくほり 朝
な朝な 言ふこと止み たまきはる 命絶えぬれ 立
ち躍り 足すり叫び 伏し仰ぎ 胸打ち嘆き 手に持て
る 我が子飛ばしつ 世の中の道（巻五・九〇四）

反歌

若ければ 道行き知らじ 賂はせむ したへの使ひ 負
ひて通らせ（九〇五）
布施置きて 我は乞ひ禱む あざむかず 直に率行きて
天路知らしめ（九〇六）

右の一首、作者未だ詳らかならず。但し裁歌の体の
山上の操に似たるを以て、この次に載せたり。

右の歌は古日という名の子を失った親の立場に立って詠じた歌である。前半部は「大船の 思ひ頼む」の三十一句。初句から第五句までは、同じ憶良の「子等を思う歌」（八〇三）

の「銀も 金も玉も なにせむに 優れる宝 子にしかめやも」にも類似の発想が見られる。「七種の宝」は仏法で珍重する宝。仏典により多少出入りがあるが、『法華経』（授記品）によれば、金・銀・瑠璃・砗磲・碼瑙・真珠。玫瑰をさす。

前半部は古日親子の情愛に満ちた明るい日々の描写である。世間の人が貴び願う七種の宝も、私はどうして欲しからう、と歌い起す。「何せむに」は、反語の表現と呼応する陳述副詞。ここでは反語が省かれているのであろう。歌は、「我が中の 生れ出でたる」と続くが、「私たちの間に生れ出た」と訳されているのが普通である。しかしここは、「我が中の」は、「我が子古日」にかかる。そして、「生れ出でたる」も「白玉の」も、「我が子古日」にかかるとみるべきである。その意味は、「われら夫婦の間の、それこそ願いに願って、やっと生まれきてくれた、白玉のようなかわいい子古日は」と訳すべきである。^{注8}

「明星の」「夕星の」は、明るる朝・夕の枕詞。星はともに金星のこと。古日親子の愛情にあふれた楽しい日々の生活を象徴するものであろう。「うへはなさかり」ウへは目に見える所。『拾穂抄』に「ほとりの心也」とあり、『略解』所引の宣長説も同じ。サカリは原文「佐我利」とあるが、私の字を今は清音に訓み、「離り」と解しておく。「お父さんもお母さん

もそばを離れないで、という意となる。「さきくさ」は「中」の枕詞。枝が三つに分れた植物というが、今日の何にあたるか未詳。「さきくさの中にを寝むと」は、親子三人の三本の川のように寝ることをいう。ヲは問投助詞。「愛しく しが語らへば……悪しけくも 良けくも見むと」は、かわいらしくもあの子が言うものだから、早く一人前になってほしい。良きにつけ悪しきにつけそのさまを見たいと楽しみにしていたのに、と親の心を述べる。「大船の」は思い頼むの枕詞。

後半の部は「思はぬに 横しま風」以下三十四句。「横しま風」は横から吹きつける突風。古日にとりついた病魔をいう。災厄を風に喩えることは仏典その他に多いという（涅槃経その他）。「にふふかに」は俄かに、の意か。「白栲の」はたすきの枕詞。以下十三句は、天つ神、国つ神に祈る装い（たすき掛け・まそ鏡手に取り持ち）とその行為を、

どうしてよいのか 手立ても分らず 白いたすきを掛け
鏡を手にとって 仰いで天の神に祈り 伏して地の神を
拝み いかようになろうと（治して下さることも生かして
下さるのも）神の思し召しのままですと 居ても立っ
てもいられず ひたすらにお祈りしたけれども 少しの
間も良くならずに 次第に顔かたちがあぐったりし、日毎

にももの言わなくなり とうとう命は絶えてしまった。

と神への祈禱の甲斐もなく亡くなった、と詠じる。

次に親の悲嘆の狂態の様を述べる。「命絶えぬれ」は已然形で言い放つ語法。「立ち躍り」は、はねあがる意で、跳び上がることに。「足ずり叫び」は地団駄を踏んでさげふこと。仁徳紀に、弟が息絶えたとき、その兄が、胸を打ち叫び哭き、さらに髪を解き屍しかばねに跨またがって死者を活きかえらせたという記事がある。古日の歌は復活のための魂振りを願っての所作や振舞が投影した表現である。「我が子飛ばしつ」古日の死を鳥が飛びさったように表現した斬新な詩句である。それも「手に持てる我が子飛ばしつ」と作者が自らの意志で行かせたように表現している。また「手に持てる」と「白玉の我が子」は冒頭の「七種の玉」に照応させた「掌中の珠」であり、子が「白玉（真珠）」という意を含ませた表現である。

『万葉考』に「横風のといふよりこゝにつゞけてとばしつといふと見るべし」とあるように「飛ばしつ」は「横しま風」と響き合う表現といえる。

「世の中の道」は「貧窮問答歌」長歌（巻五・八九二）にも「かくばかり すべなきものか 世の中の道」とあり、同じ気持をいったものである。独立の体言止で言い放った「世の中

の道」は、世の中の道理に対する「すべなさ」を強い悲哀をこめて結句としている。

反歌の一首目の「道行き知らじ」の道は冥界への道。後生ごじょうへ転生するまでさまようといわれる中有の旅をいう。「略はせむ」マヒは、まいない。冥界の使に事前に贈る礼物。「したへの使」死後に赴くという地下の死の国から死者を迎えにくる使。「負ひて通らせ」この子を背負ってお通りください。

『日本霊異記』に「閻羅王の使の鬼の、召さるる人の略を得て免ゆるしし縁」（中巻二四）、「閻羅王の使の鬼の、召さるる人の饗を受けて、恩を報いし縁」（中巻二五）の話を載せている。閻羅王や鬼の話などは当時の俗信としてかなり普及していたらしい。

反歌二首目の「布施置きて」は、仏法僧への供養の品物。「あざむかず直に率行きて」アサムクは、だます意のみならず、誘惑することといった。『新撰字鏡』の「誘」の字にサンフ・アサムクの傍訓があり、「導也、引也」と注している『新編全集本』。これに従い「あらぬ方へ誘わずに真っ直に連れて行って」と訳する。「天道」は、死後の世界への道。生天往生への道。

右の反歌二首について、井村哲夫氏注9は、

全注釈等に、反歌二首の間に「黄泉」と「天」と冥界のイメージが相違しているという意見があり、それがまた九〇六の短歌とみない理由になっているが、誤解であろう。先述のように、反歌第一首は中有の道行きを歌い、第二首は追善供養を重ねて後生を願うのであって、二首は思想において矛盾するどころか、二首一対としてはじめて供養の始終を歌って完結しているのである。

と説くのに従う。それにしても、黄泉の使に便宜を乞うて、まひないを握らせ、どうか背負って行って下さい。布施を捧げますから天への道を教えてやって下さい。など現世の実質的な価値を以て詠じている。

長歌冒頭の「生れ出でたる白玉の我が子古日」、末尾の「手に持てる我が子飛ばしつ」、反歌の「若ければ」など古日は幼児（愛子）として描き出されている。

さて、前述した「男子名は古日に恋ふる歌三首 長歌一首 短歌二首」のまとめを述べる。憶良の先の作品には、日本挽歌（巻五・七九四〜七九九）、「感情を反さしむる歌」（八〇〇〜八〇二）、「子等を思ふ歌」（八〇二〜八〇三）、「世間の住み難きことを哀しぶる歌」（八〇四〜八〇五）のように、漢文序（漢詩も含めて）プラス長歌、短歌の様式を取る。新らしい漢

倭混淆の文芸を誕生させている。漢文序により、主題の鮮明さ、論理、思想性の深さなどこれによって支えられている。それはそれなりに高く評価されてよい。

しかるに「貧窮問答歌」（八九二〜八九三）と「古日に恋ふる歌」では漢文序を排している。そして伝統的なヤマト歌のみをもって作品を歌い上げる。

古日の歌の長歌は明と暗の巧みな構成を有している。世の中の人が貴ぶ七種の宝よりも、愛子が勝るとその観念を述べる。そして古日の生前の愛らしさと幸福な日々を叙し、古日の成長を期待する。（一転して暗へ）ところが思いもかけない病魔が無常の暴風のように訪れ、親は狼狽して、神に一生懸命に祈る。しかしその甲斐もなく古日の死、親の動転、悲嘆、狂乱する苦悶と絶望、そして無常の嘆きで歌を結んでいる。

反歌は供養の始終を歌う巧みな対をなし、情理・祈願も兼備させて完結する。この歌は子に対する親の愛執と苦悩を実にリアルに描きだしている。

憶良の代表作の貧窮問答歌と並び称されるように、古日の歌（挽歌）は、首尾完備された構成と哀感の叙情を吐露した佳作といえる作品である。

注

- 1 『筑紫万葉の世界』林田正男編「万葉集筑紫歌壇」
- 2 『憶良と虫麻呂』「思子等歌の論」井村哲夫。同『万葉集全注』(巻第五)
- 3 『万葉集を学ぶ』(第四集)「子等を思ふ歌」大久保廣行
- 4 『上代文学』(第六七号)「子等を思ふ歌」と宣子祥「東茂美
- 5 『人麻呂・憶良と家持の論』「憶良作歌に見られる父子の恩愛」川口常孝。同『万葉歌人の美学と構造』でも古日は憶良の子であるとす。
- 6 『万葉集を学ぶ』第四集「世間の住み難きことを哀しむる歌」林田正男、後『万葉集筑紫歌の論』所収
- 7 別冊国文学(學燈社)『万葉集必携Ⅱ』「子等への愛の歌」原田貞義
- 8 『万葉のいのち』「一人子の死」伊藤博。同『万葉集積注』(三)
- 9 『万葉集全注』(巻第五)井村哲夫